

# 役者が違おうでしよ

文

## 伊藤公一

text by Kouichi Ito

「好きなタイプを芸能人で言えば……」の如く、テレビに出演する人々は身近な存在であるゆえ、芸能ネタは確かに面白い。

よって、この夏前半の注目ニュースは吉本興業お家騒動である。專業の歌手でも役者でもないところの芸能人に、吉本のお笑い芸人が位置するのであるが、バラエティ番組に限らず、いつの間にか、テレビの地上波放送を席巻している。

彼らの出演は、芸人とテレビ局、その間を仲介する芸能事務所の3者で成立する契約社会であるわけだが、そこに介在する微妙なパワーバランスは素人には分かり得ない。とは言え、それは芸能界だけに存在する特別な間柄ではなく、あらゆる職域にも舞台と楽屋が存在しているので、所感を述べる。

今回の一件、そもそもはエース社員の不用意な行動、虚偽報告から始まり、会社が社員の契約を解消。ところが、その手段、方法が理不尽だと、社員側が会社を無視して独自に記者会見を実施。その捨て身な姿に世論は一気に社員サイドに傾倒。やむを得ず、社長が弁明会見し、社員に頭を下げて契約解消を解消したにも係わらず、5時間半も恥をかかされ、管理者の資質が無いとまで攻め立てられる。その後、あらたに社員側に不利な報道があり、やはり、契約解消の解消を解消の方向に：

と。ここまでが当原稿執筆締め切り時点での経緯である。

その間、朝の情報番組司会を務めるエリート社員が、思い余った気持ちを吐露。現職員や大御所会社OBが、週刊誌の取材やSNSを通じて、社長を庇護したり反旗を翻したりのコメントを発信。

今回のケース。記者会見の場で民意を競うのであれば、楽屋で働く管理職と比し、テレビや舞台を仕事のフィールドにする芸能人の方が有利に決まっている。

会長も社長も元辣腕マネージャーで、やり手の経営者と知ったが、舞台裏にいる人物が、カメラ慣れしているわけがない。正に「役者が違おうでしよ」だ。そして事態の収拾に努めている間、タレントに突然、先手を打たれた日には叶わないものと同情する。

さらに大人の男が衆目で涙する姿は見るに堪えない。プロであれば、悲しくなくても涙は流せるはずだが、芸人は陽気に人々を笑わせて和ませるのがミッションの職業人である。真面目な泣き顔が記憶されたら、その後に面白くても笑えない。芸能事務所の社長も「冗談が通じなかった」と、とほげを押し通すような型破りなタイプであって欲しかった。

本稿、あえて実名を伏せたが、半年も経てば、再び彼らの振る舞いに笑っ

ているか、表舞台から去り、その存在すらも忘れてしまうのである。それにしても吉本興業に所属芸人が6000人いると聞き、驚いた。世の中、素人レベルでも面白い人が沢山いるが、芸人の笑いに対する期待は違う。

金がかかっているわけだ。そこで支払った金額の代償として、素人を一斉に笑わせる能力、技術を持った人間が、6000人もいるとは思えない。

### Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/> 名古屋甲状腺診療所（名古屋分院）<http://www.kojin-kai.jp/nagoya/> さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院）<http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>



## 表参道日記